

---

# とけい

colors

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
とけい

【Nコード】  
N7807C

【作者名】  
colors

【あらすじ】  
『なんとなく』そんな気まぐれで起きる幸せもある。いつの日かの時計屋さんとの思い出。

## （前書き）

部長命令で15分で作ったものをベースにしているので、短乱文ですがどうか読んでみてください。

秋の高い空のした、鮮やかに色づいた銀杏並木。やまぶき色の落ち葉が足元に山を作っている。

ふとした気まぐれで、時計屋さんに入ってみた。

「いらつしゃい。ゆつくり見ていつてね。」

暖かい言葉で出迎えたのは老紳士。店の雰囲気、壁のちょっとはげかった塗装などからも、老舗だと伺える。

店の奥にあったのは大きな置時計。とても古くて、もう動いていない。アンティークのようだ。

おじいさんと古時計。あまりにも歌の通りだから、ほんの少し、口元がゆるむ。

なんだか気分がいいから、老紳士との会話もとても弾んだ。

特別なことでもないけれど、ちよつと幸せな気分。

気がつくと、窓から見える空は日が暮れている。夕日のオレンジ、薄紫。でも東の方はまだ青いまま。窓の四角い枠に囲まれて、一枚の絵画のように見えてくる。

「そろそろ帰ります」でもなんだか居心地がよくて、そのまま帰るのは惜しい気もした。

だからだろうか、懐中時計を買ってしまった。ちよつと高いけど、綺麗な金色の輝き、手にした時の確かな重みが気に入ったから。

「また来ます」そう言っ店を出たけれど、もうあの店と、あの老紳士に会うことはない。

あの古時計が刻んでいたのと同じ、時間というものが、彼らを遠いところにやってしまった。

悲しいけれど、だからこそ、大切にしようと思える。

ちよつと幸せな気分になれたこと、窓から見た空の絵画、そしてこの懐中時計を。

（後書き）

初投稿で、思いついたものをすぐ書いてしまったのであまり完成度は高くありません。

しかも小説というより詩に近い感じ・・・これから頑張ります>< 鎌女の部誌、空色の『懷中時計』へのオマージュのつもりで書きました。

b y 霜月

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7807c/>

---

とけい

2010年12月8日13時39分発行